

会員のば

ベートーヴェンイヤーに寄せて

旭川市医師会
旭川三愛病院

橋爪 裕子

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは1770年12月16日頃の生まれ、死去したのは1827年3月26日とされています。56年の生涯でした。2020年は彼の生誕250周年です。

ベートーヴェンは大変頑固で偏屈というイメージがあります。例えば珈琲を入れる時は、必ずコーヒー豆をきっちり60個数えていたというエピソードが知られています。またご近所との不和などから、生涯で70回～80回も引っ越しをしたことは有名です。

私の中のベートーヴェン像は、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」と重なります。ノーベル文学賞受賞作家ロマン・ロランはベートーヴェンに強く魅了されて、彼をモデルにした長編「ジャン・クリストフ」を書きました。私は中学生の頃、この作品を短縮版で読んで(実は大変長い小説なのです)、ベートーヴェン＝ジャン・クリストフのイメージが固まりました。

ベートーヴェンが作曲した最後の作品は、弦楽四重奏曲第16番と考えられています。しかし第13番の弦楽四重奏曲の大フーガと呼ばれる最終楽章が長すぎて評判が悪く、それに替わる最終楽章を後から書きなおしています。これが完成した最後の作品のようです。

ベートーヴェンは亡くなるほぼ1年前の1825年に、弦楽四重奏曲第13番と第15番、翌1826年に第14番と16番、そして大フーガに替わる第13番の最終第6楽章を作曲しています。ベートーヴェンはその最晩年に、続けて弦楽四重奏曲を作曲しているのです。そしてそのどれもが素晴らしい傑作です。私が持っているのは、アルバン・ベルクカルテットの全楽演奏CD 7枚組です。だいぶ以前に買ったのですが、一部のCDしか聴かないままでした。最近、ようやく全曲をじっくりと聴きました。第13番は大フーガと、後から変更された最終楽曲の両方が録音されています。大フーガの演奏時間は15分33秒、変更された最終楽曲は7分50秒です。大フーガは、ピ

アノソナタ第29番ハンマークラヴィーアの第4楽章のフーガに相当する壮大な曲と思います。

私が一番好きなのは第14番です。凍てつく氷原に立つような透明感と、諦めに近いような雰囲気があったよう緩徐楽章で始まります。そしてベートーヴェンの構想は4楽章ではおさまりきれず、ほとんど途切れることなく第7楽章まで続き、何故か突然終わりを迎えるような感じで終曲します。

第13番の第5章「cavatina」そして第15番の第3楽章「リディア旋法による病から癒えた者の神への聖なる感謝の歌」などの緩徐楽章は、例えようもなく美しく心に染み入ります。リディア旋法とは、教会のグレゴリオ聖歌で用いられていたもので、「ファソラシドレミファ」の音階からなるものらしいです。彼の晩年の作品は、フーガやグレゴリオ聖歌の旋法など、過去の音楽への回帰がみられます。

私はベートーヴェンの弦楽四重奏曲は一人で聴くのが好きです。独り占めし全身を耳にして聴く音楽だと思います。

今年たくさんのコンサートや番組でベートーヴェンの曲がかかることと思います。楽しみです。

(平野昭著 「ベートーヴェン」 新潮文庫 年表を参考にしました)

